

アメリカにいた頃、勤めていたデザイン会社 ID TWO (今の IDEO) では、毎週金曜日は夕方から Friday drink といって、ビールを飲みながら近隣の友人デザイナーを呼んで話を聞いたり、おもしろいプロジェクトのトピックを紹介し合ったりしていた。デザイナーたちほとんどが世界中から集まった多国籍集団だったから、それぞれのデザイン観も少しずつ違って、ユニークなグループを形成していた。アメリカという国の体質でもあるが、私は日本人であるということを、日本にいるときよりもずっと意識して生活するようになっていた。それが自分のデザインに強く影響を与えないようにと、反対に注意を払っていたくらいである。

入社して二年目頃だったと思う。私はみんながどんなデザイン観で仕事をしているのかを聞いてみたくなり、Friday drink で発表し合ったらどうかと提案した。すると「おまえが言い出しつぺだから、おまえからやれ」ということになり、しっかりと考えてもいなかった自分のデザイン観を考えるはめになってしまった。

「自分は一体、何をもとにデザインを決めているのか」という自分自身への問いに、「張り」という言葉が迷いもなく思い浮かんだ。ものをかたちづくるとき、質の基準のようなものだった。かたちに緊張感をもたせたい。生き生きとしたものをつくりたいという漠然とした思いが、総称されて、張りという言葉になっていった。張りをみんなに説明しようと思った。しかし考えれば考えるほど、張りという言葉がもつ抽象的な概念の奥にはまり込んでいった。かたちに張りをもたせるといふことはどういうことなのかと、悶々と考えた。張りという言葉は、よく使われていた。「張りのある肌」とか「張りのある面」とかである。「あの人は張りがある」とか「張りのある人生」というように、人の生きる姿勢のようなものを表すときにも使われる。

まずは、物理的な表面の力を美的観点から比喩した言葉であることはわかった。表面が適度に引つ張られて、弾力性のある状態を指すのだという感覚を理解した。例えば肌の場合でも、「張り」と「腫れ」とでは大きく違う。張りのある肌面とむくんだときの肌面とでは、明らかに美しさが違う。何がその違いを見せているのだろうかと考えた。

人間だけでなく、野菜や果物の表面の張りも、人はいとも簡単に見分けられる。例えばイチゴを買うとき、その艶や色から、どれが新鮮で食べ頃なのか判断できる。表面の種が埋まり込んだくぼみに写り込んだ光のハイライトの肌理きまによって全体の表面を理解し、色と相まって、熟した度合いも判断できる。触ればそれがより明確にわかるのだが、店ではそれはできない。表面のテクスチャーと光と曲面の曲率によって、中身の度合いが判断されているのだと思った。

中身の度合いとは、その物体を構成している素子の秩序立った配列のことであって、その素子自体にも弾力があり、その弾力の集合体が表面を成している、

と想像した。確かに、「腫れた」肌も「むくんだ」肌も、その素子自体の秩序が乱れているか、あるいは均質な素子で構成されていないということである。素子が弾力性を失っているということもわかる。物理的な表面の美を「張り」という比喻によって表現することは、その物体が健全な細胞の秩序立った配列でできていることの証であるということがわかった。

だとしたら、表面の肌理と光をその面の曲率と兼ね合わせて操作すれば、張りのある表面が作り出せるものであることはわかった。たとえ表面が平坦なものであったとしても、その平坦な表面が終わる部分、つまり縁へりを操作することで、平坦でも張りある表面ができるのではないかと考えた。例えば、四角い箱ならばその角のRアーチの処理とか、壁ならばその壁の終わる角とか、他の壁との交わりの部分の処理で、面の張りは作り出せるのではないかと思った。

しかし、考え進むうちに、張りのある表面をつくらうとするには、それは内部の現れであるのだから、そのものを成している要素、デザインというならば製品の内容物であったり、それを覆う素材であったり、あるいは、構造を成す素材そのものから整えなければ、単に張りのある生物の表面を模倣して貼りつけたところで、何の美しさもないではないか、と思えてきてしまった。今まで疑問すらもたなかった内と外の無関係さや、表面だけの見せかけの張りは美しいものではないのではないか、とも思えてきてしまった。いったいその面の張りを規定する要素は何なのか、ということが気になり始めていた。

もうひとつの、人間の生きる姿勢のようなものを表す「張り」とはどういうものなのか、ということも考えた。「あの人は張りがある」といったりするのだが、一体何を見てその張りを感しているのだろうかと思った。「張りのある肌」の持ち主であることなど到底なく、張りは若者からも老人からも感じる事ができる。その人の生き方やその生き方が現れる行動、そしてからだの動きや、発声、目の動きなどのすべてが、まとまった徴ちゆうひん憑ひょうとなって「張り」という言葉で表されるのではないかと思った。「張り合い」という言葉があるように、生きるための目的、あるいは「生きがい」ともいわれるものがその人間に加わる力であって、それを押し返す力によってバランスされている状態が張りであり、それによって表に現れる力の徴憑ちゆうひんが、張りを視覚化しているのではないかと思った。

その人に加わる力はさまざまであって、その力を自分でコントロールできないものもある。あるいは、それが何かの目標であったりすると、その力は自らが課した力ということにもなる。その力の要素は人によって異なるので、一律の価値ではない。加わる力の大きさも人によって異なる。世界や会社を動かす責任も、毎日に水をあげるといふ老人の生きがいも、あるいは病気に耐えるという意思も、それを押し返すことでバランスするということだ。その姿勢が美となるのであって、それぞれの力の大きさを比較する価値はない。

外の力によって内の力を得、バランスし、安定するための動作がからだの動きに現れてくる。そのことによって、張りは見いだされるのである。

物理的な表面の張りも、精神的な生きる姿勢としての張りも、そのもととなる力によって現れ方は変わってくる。張りが、そのしなやかな、生き生きとしたものの美的表現の言葉であることはわかっていたのだが、その力を規定するものが何であるのかが気になり始めた。たぶんそれは、そのものの機能であったり、環境や状況の中のそのもの立ち位置であったり、そのものに触れる人たちの気持ちであったり、生活感であったりするのではないかと考えるようになった。

ものとその周りにある環境との関係が、そのものの輪郭を決めていく。その輪郭を見いだすのがデザイナーの仕事であるということがわかってきた。その輪郭とそこに加わる双方の力を見いだせば、それによって表面の力が自然と規定されていく。自然と張りが見えてくるということがわかってきた。

「張り」という言葉を掘り下げて考える機会を得たことによって、デザインを深く考えることができた。Friday Drinkでの発表は、大盛況の内に終わった。その小さな発表会の波紋はベイエリアに広がり、スタンフォード大学での特別講義にも取り上げられ、米国内のデザイン会議でも発表されるまでに至った。そして、「HARI」というタイトルのレクチャーを、アメリカとヨーロッパでたくさん行なった。

この考察は、私の中のものやもやした造形に対する疑問をクリアにするきっかけとなった。それまでの私のデザインに対する考えは、外観というエレメントに集中し、外と内、中身との関連性を考慮せず、かたちとして完結する造形表現であった。張りという言葉も、力をもった表面の表現としてのひとつのエレメントとして捉えていた。中身と関係ない造形要素としての面の張らせ方やスタイリッシュな表現は、確かに高い完成度をもって周囲を驚かせたはしたが、私は、そのかたちやむやみな力の表現が、そのものの置かれる環境や、人とう関係しているのかといったことをあまり考えていなかった。

「張り」を考えていて、「私には張りがありません」という表現はあり得ないと思った。

張りは客観的に感じるものであって、意図的につくり出せるものではないと思った。私はそれと同じことをしようとしていたのだ。張りのある造形をつくらうとしていたのだ。

確かに、ものの表面の光や骨格のバランス、面の繋がりや細部の配置がまとまりのある美しい造形を生み出すことに違いはない。しかし、そのかたちも、そのものがそこに存在する意義によって自然と定義づけられていくものだということが、やっとそのときわかったのだ。外の要因や、外の力が、内を決めているということが。その必然的かたちが、必然的力をみせる。それが「張り」なのである。

私は「張り」を考えることによって、「張り」のあるような造形をやめたのである。

問1 本文の内容を400字以内で要約しなさい。

問2 本文の「ものとその周りにおける環境との関係」について、あなたが志望する分野で考えられる具体例を示し、800字以内で説明しなさい。

ち	な	な	を	と	の	周	よ	る	れ		ら	を	な	も	の	も	で	細	に	
が	い	く	考	で	輪	り	っ	姿	る		だ	得	ど	の	美	の	あ	胞	よ	物
必	。	、	慮	表	郭	に	て	勢	の		の	、	の	を	し	を	り	の	っ	理
然	外	張	せ	面	と	あ	現	と	で		動	バ	外	表	さ	成	、	秩	て	的
的	の	り	ず	の	そ	る	れ	し	あ		き	ラ	の	す	も	し	そ	序	表	な
力	力	は	、	力	こ	環	方	て	る		に	ン	力	「	な	れ	立	現	表	
を	が	意	か	が	に	境	が	の	。		現	ス	に	張	い	を	っ	す	面	
み	内	図	た	規	加	と	変	張	物		れ	し	よ	り	つ	た	る	の		
せ	を	的	ち	定	わ	の	わ	り	理		る	、	っ	「	く	配	こ	美		
る	決	に	と	さ	る	関	る	も	的		こ	安	て	と	素	ろ	と	を		
こ	め	つ	し	れ	双	係	。	、	な		と	定	そ	は	か	う	は	、		
と	、	く	て	る	方	に	そ	そ	表		に	す	れ	、	ら	と	で	、		
が	そ	り	完	。	の	よ	れ	の	面		よ	る	を	生	整	す	き	そ		
「	の	出	結	外	力	っ	は	も	の		っ	た	押	き	え	る	の	張		
張	必	せ	さ	と	を	て	、	と	張		て	め	し	る	な	こ	い	り		
り	然	る	せ	内	見	決	も	と	り		、	の	返	た	け	と	る	「		
「	的	も	る	の	い	ま	の	な	も		見	動	す	め	の	は	こ	と		
だ	な	の	の	関	出	り	と	る	、		い	作	内	の	よ	、	と	が		
。	か	で	で	連	す	、	そ	力	生		出	が	の	目	う	そ	健	い		
	た	は	は	性	こ	そ	の	に	き		さ	か	力	的	な	の	全	う		
																	証	な	比	
																		な	喩	

ど	が	に	て	制	品		！	在	で		ど		リ	の	分	人	が	野	つ	
う	な	は	も	作	は	例	と	り	あ		は	な	エ	あ	の	々	求	で	い	ー
か	い	元	、	し	、	え	し	方	り		、	ぜ	イ	る	作	に	め	は	て	も
考	°	々	作	た	た	ば	て	を	、		何	な	タ	作	品	ど	ら	、	の	
え	作	存	品	も	だ	、	必	考	創		を	ら	！	品	の	ん	れ	あ	私	と
る	品	在	の	の	可	私	然	え	作		表	、	に	を	在	な	て	る	の	そ
よ	に	し	意	だ	愛	が	的	て	活		現	作	な	作	り	感	い	状	志	の
う	ど	な	義	っ	い	イ	な	活	動		し	品	こ	こ	方	情	る	況	望	周
に	の	い	が	た	女	ラ	か	動	す		た	を	こ	と	に	に	の	に	す	り
な	よ	メ	無	°	の	ス	た	す	る		い	作	と	が	つ	か	お	る	コ	あ
っ	う	ツ	け	そ	子	ト	ち	こ	と		か	る	が	で	い	、	い	ミ	あ	る
た	な	セ	れ	れ	を	を	に	と	も		に	際	で	き	て	自	て	ツ	環	境
現	意	！	ば	を	描	描	な	で	、		よ	に	き	、	考	ほ	分	自	ク	境
在	図	シ	、	S	き	き	か	、	自		っ	意	と	張	え	し	の	分	イ	と
で	を	な	見	N	た	始	ら	ク	分		て	識	考	り	る	い	作	の	ラ	の
は	含	ど	る	S	い	め	だ	リ	の		決	す	え	の	こ	か	品	作	ス	関
、	ま	伝	側	に	と	た	°	工	作		ま	る	る	あ	と	な	に	品	ト	係
実	せ	わ	の	投	思	頃		イ	品		る	も	°	る	で	ど	触	は	の	ー
際	る	る	人	稿	っ	の		タ	の		の	の		ク	張	、	れ	は	分	に
に	か	訳	々	し	て	作					の	な			り	自	る	何		

	の	る	制	ジ	つ	と		独	し		ー	し	イ	は		が	こ	似	タ	評
	だ	こ	作	性	い	の	よ	自	っ		の	か	タ	悪	も	作	と	し	ー	価
	と	と	で	な	て	関	っ	の	か		影	し	ー	い	ち	品	は	て	が	も
	考	で	き	ど	考	係	て	味	り		響	、	の	こ	ろ	に	そ	い	い	高
	え	、	た	を	え	ー	、	を	と		を	そ	人	と	ん	反	の	た	る	ま
	る	張	り	含	る	に	私	持	考		受	れ	々	で	、	映	人	時	か	っ
	。	り	、	ま	こ	つ	は	つ	え		け	ら	も	は	目	さ	の	期	ら	て
		の	創	せ	と	い	ー	作	る		つ	の	そ	な	標	れ	二	も	と	い
		あ	作	た	で	、	も	品	こ		つ	人	う	い	の	な	番	あ	い	る
		り	活	り	、	自	の	を	と		も	々	し	。	煎	く	じ	っ	て	。
		ク	動	し	自	分	と	仕	で		、	は	て	実	な	っ	で	が	、	ま
		リ	の	て	分	の	そ	上	、		自	、	き	際	な	て	あ	そ	、	た
		エ	意	張	の	作	の	げ	そ		分	目	て	に	っ	り	結	の	、	そ
		イ	義	り	作	品	周	て	の		の	標	い	、	い	、	局	人	の	目
		タ	に	の	品	の	り	い	ク		作	の	る	有	た	、	や	の	標	の
		ー	つ	あ	に	在	に	る	リ		品	ク	人	名	。	自	っ	絵	ク	リ
		に	い	る	メ	り	あ	。	エ		の	リ	が	な	分	て	柄	を	エ	イ
		な	て	作	ッ	方	る		イ		意	エ	い	ク	の	い	を	真		
		れ	考	品	セ	に	環		タ		義	イ	こ		個		真			
		る	え	を	ー		境		ー		を	タ	と		性					